

ケーテ・コルヴィッツ  
「1914-1933年 変化の歳月（1943年）」 — 試訳

Die Jahre 1914 – 1933 zum Umbruch (1943): Käthe Kollwitz, Die Tagebücher, 1908-1943. hrsg. v. Jutta Bohnke-Kollwitz. Berlin 1989.

稲 福 日出夫

訳者まえがき

以下に訳出を試みたのは、Käthe Kollwitz: Die Tagebücher, 1908-1943. hrsg. v. Jutta Bohnke-Kollwitz. Berlin 1989. 所収の、ケーテが1943年に書き残した回想記、Die Jahre 1914 – 1933 zum Umbruch (1943), ss. 745-747. である。

1914年はケーテの二男ペーターが戦死した年であり、1933年はドイツでナチスが権力を掌握した年である。また、1943年8月にケーテは、ベルリンからノルトハウゼンに疎開しており、同年11月下旬にはベルリンの自宅が空爆によって破壊されている。その自宅には、回想記を執筆するために書き留めておいたノートや手帳などがあったが、すべて焼尽した。

この回想記は、1933年までの出来事が綴られているわけではなく、末尾は1938年11月7日の深夜に起こったポグロム（ユダヤ人迫害）の記述で終わっている。意外な感がなくもない。が、それは折に触れて書き残していたメモの類がすべて焼失したことにより、33年以降の歳月を書き続けることが困難になった。が、しかし、同胞によって引き起こされたこの蛮行を忘れてはならない。このポグロムだけは記憶をたよりに書き留めておきたかった、ということかもしれない。その事件の後、ケーテは、1940年に夫カールと死別した。また、42年には初孫のペーターがロシア戦線で戦死した。が、そうした事柄には触れられてない。

この短い回想記は、1943年末時点までに書き終えていたケーテの草稿である。当時、ケーテもすでに76歳をむかえており、彼女は、1945年4月22日に77

歳で死亡している。

ケーテは、長男ハンスの求めに応じて、いくつかの回想記を残している。

私は、本誌前号で、1942年にケーテが夫カールのことを淡々と綴った回想記を紹介した。「私の夫、カール・コルヴィッツ(1942年)－試訳」(『沖縄法政研究』第14号、2012年1月、91-101頁)。ケーテの孫ユッタが編集したケーテの『日記』には、「補遺、自伝的な手記」として、4種類のケーテの回想記が収録されている。「思い出(1923年)」「過ぎた時への回顧(1941年)」「私の夫、カール・コルヴィッツ(1942年)」「1914－1933年変化の歳月(1943年)」。前のふたつには邦訳がある。鈴木東民訳『ケーテ・コルヴィッツの日記－種子を粉にひくなー』(アートダイジェスト、2003年)所収。後のふたつは試訳ではあるが、ともかくも、この『日記』所収の「自伝的な手記」の邦訳がそろったことになる。なお、編者ユッタの執筆した『日記』「序文」は、この「変化の歳月」の背景を知る上で参考になる。「ケーテ・コルヴィッツ『日記』「序文」－試訳」(『沖縄法政研究』第13号、2010年12月、125-168頁)参照。

ケーテは、終始一貫、戦争に反対論を唱えていたわけではない。この手記は、冒頭で第一次世界大戦を迎えるまでのケーテの家族の状況を簡単に記した後、志願兵としてこの戦争に参加したいという二男ペーターの固い信念、それに対するカールとケーテの葛藤を綴っている。(その頃の『日記』によるとー。1914年8月10日の晩、18歳のペーターは志願兵として応募するため、父親カールに同意を求める。その願いにカールは断固反対する。「祖国はまだお前を必要としていない。必要だったらとっくにお前を呼んでいるはずだ」。ペーターは反論する。「祖国は僕の年代の者をまだ必要とはしていない。でも僕を必要としているのだ」。父子の果てしない議論の末、結局、ケーテは、ペーターの願いをかなえてやるようカールに頼む。翌11日、ペーターはカールに付き添われて志願兵の手続きをとる。「晩、カールと私は二人きりになった。そして、泣く」。Tagebücher, ss. 152-153. 清真人・高坂純子『ケーテ・コルヴィッツ－死・愛・共苦』御茶の水書房、2005年、54-56頁参照)。ペーターの志願をめぐるその晩の情景を、ケーテは、おそらく何度も何度も思い出さずにはおれなかったことであろう。ペーターの願いをかなえてほしいと、彼とともにカールに頼み込んだ心境とは一体何だったのか、あっけなく死んでいったペーターの心情をどう推し量ったらいいのか。その心理は、ペーターの死後、

ハンスの志願を巡る夫婦間のやりとりにも映し出されてくる。息子と気持ちをひとつにしたいという思いと、にもかかわらず、息子の希望をかなえたが故に、息子を死なせてしまった。このふたつの心情のせめぎあい、葛藤が、その後のケーテの生き方を根底において規定している。

ペーターの記念碑を制作する、という「私の仕事」——その記念碑の構図は、幾度も練り直されていく。その構図の変遷は、ケーテの戦争観の揺れと重なっている。

また、ケーテは、カール・リープクネヒトやローザ・ルクセンブルグの信念に共感する。しかし、リープクネヒトのデスマスクを描きながらも、ケーテは、彼らの組織に加わることをためらい、時には、周囲の彼女に寄せる期待に苛立ち、反発さえ覚える。その辺りの情況、またケーテの心理と、1848年ドイツ三月革命に向かう時代に（いわゆる「三月前期」）、周囲のグリム兄弟、とくに兄ヤーコプに寄せる期待、それに対するヤーコプの心理——これらふたつは、およそ70年余の時間を超えて、かなり似通っているように思われる。いわば「意図せざる」政治指導者となったヤーコプ・グリムは、結局、国民議會を去り、書齋に戻る。ヤーコプの胸底に渦巻いていたであろう苛立ちを共有するケーテもまた、政黨員として政治に直接コミットすることを嫌い、むしろアトリエでの「静寂」を求めている。しかし、アカデミーを除名され、結局、アトリエも引き払わざるをえなくなるのではあるが・・・。

ケーテの手記を読んでいると、ヤーコプ・グリムの書簡などを読んでいるときにも感じることであるが、彼女の生き方、考え方、社会への接し方に、その作品から受ける印象とは別種の、ある種きわめて人間的な側面を感じてしまう。作者の手から離れた作品が社会的評価を受け、さらなる期待が寄せられる。もちろん、彼女の作品に宿る種子が、そうさせるのではあるが、しかし、めまぐるしく推移する政治的現実を前に、過大な役割を期待され、みずからの立ち位置に思い悩む。社会に立ち向かい、そこから「意図せざる」波紋が押し寄せたとき、揺れながら、さらに或る信念が形成されていく。あるいは、揺れを幾度も経験するなかで、明確で確固たる意志が作り上げられていく——。そうした側面がケーテのなかにもあるように思われる。

ケーテは、折に触れてゲーテを読んでいる。実際、ユッタの編んだこの『日記』の人名索引をみても、ケーテの両親や夫、子供たちといった彼女の身内の人名以外では、ゲーテ (Goethe, Johann Wolfgang von) の出てくる個所が、他の人名に比べて著しく多いことがわかる。(たとえば、1917年3月13日の『日記』では、ゲーテの自叙伝『詩と真実』を引用しつつ、ケーテ自身の生き方との対比が具体的に記されている。Tagebücher, ss. 309-311. 鈴木訳、117-118頁参照。また、『日記』「序文」のなかでユッタの記すところによれば、死と向き合ったケーテ最晩年の数ヶ月間、77歳と21歳の、この祖母と孫の二人の関係は、時にはぎくしゃくしたものとなった。が、「ユッタが毎晩、ゲーテの『詩と真実』の一節をケーテに読んで聞かせるということで意見が一致した」という。Tagebücher, s. 31. 前掲、拙訳、167頁参照)。志願兵としてヴェンスドルフの兵舎にいた二男ペーターに面会に行った1914年10月12日 - その日が結局、二人にとって最後の別れの日となってしまうが -、ケーテはペーターに、ゲーテの『ファウスト』を手渡している。その日のケーテの『日記』には、ペーターが駅まで自分を送ってくれたこと、「きっと帰ってくる」と約束したこと、また、目に入った多くの若い兵士たちの様子を描写した後、最後の行に「彼の標識番号は115である (Er hat die Nummer 115.)」と記されている。翌13日にはペーターの部隊は前線へ向かい、その10日後に彼は戦死した。おそらく、ペーターのリュックには、母親からもらったゲーテのこの文庫本が入っていたであろう。

そして、ケーテの最後の石版画 (リトグラフ) 作品が、「種を粉に挽いてはならない Saatfrüchte sollen nicht vermahlen werden」(1941/42年)である。腕をまわして子供たちを庇う母親の像を、これまでもケーテは何度か制作している。石版「母たち Mütter」(1919年)は、群れをなした母親たちが、幼子を抱きあげ、あるいは腕を前にのぼして抱きしめ、子供たちとともに前方を見つめている構図であり、1923年に完成した7葉からなる木版画連作『戦争』の第6作品「母たち Die Mütter」(1922/23年)では、母親たちは腕を伸ばし、互いに抱き合うようにしてスクラムを組み、中に子供たちを隠している。さらに、ブロンズ「母たちの塔 Turm der Mütter」(1937/38年)では、母親は真正面を向き、腕を後ろに回して子供たちを庇って立っている (なお、作品の原題は、ベルリンにあるケーテ・コルヴィッツ美術館のカタログ後掲一から引いた。手元にある邦語文献を見る限り、ケーテ版

画の個々の作品名に定まった名称はなさそうである）。

「種を粉に挽いてはならない」について——。第1次世界大戦末期の1818年10月22日、リヒャルト・デーメルは、「唯一の活路」として戦争継続、徹底抗戦を主張した。それに対し、ケーテは10月30日、「リヒャルト・デーメル氏に告ぐ！」を發表して反論した。1941年12月の『日記』で、ケーテは、そうした23年前の出来事に触れた後、こう記している。「当時、私は、デーメル氏に対する反論を書いた。その文章を、私は、ケーテの作品である〈修業証書〉から引用した『種を粉に挽いてはならない（die Saatfrüchte sollen nicht vermahlen werden.）』で結んだ」。ケーテのこの反駁文は、実際、「ほんとうにもう沢山なぐらい死んだのだ！もうこの上だれも死んではならない！わたしはリヒャルト・デーメル氏が『種を粉に挽いてはならない』と言った偉大な人のことを思いおこしてほしいと思う」という文章で結んでいる（Tagebücher, s. 840. 鈴木訳、131頁参照）。

この短い一句は、「ドイツ教養小説の最高峰」とも称されるケーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の第7巻第9章末尾に挿入されている「修業証書（Lehrbrief）」のなかに出てくる。

主人公ヴィルヘルムの人間形成（Bildung）が或る段階に到達したことを祝福するため、神父が「おめでとう、ヴィルヘルム君。あなたの修業時代は終わったのです」と述べ、小さな巻物（修業証書）を手渡す。この修業証書には、続く第8巻で明らかになるように、人間の成長過程と社会全体の関係も示唆されている。たとえば、「すべての人間が集まってこそ人類となり、すべての力を寄せ集めてこそ世界は出来る」、あるいは、幼児の片言や少年の取っ組み合いといった「目の前にある具象的なものに対するきわめて素朴な感情から、はるかに遠い精神的未来にたいする、もっともかすかな予感や希望に至るまで、これらのすべてが、そしてそれよりもはるかに多くのものが、人間のうちにあり、それを育て上げなければならないのだ」といった記述がこの巻物に含まれていることが明らかにされる（山崎章甫訳『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代（下）』岩波文庫、2000年、237頁）。第7巻末尾の段階でケーテが示した修業証書は、次のような表現で始まる。「芸術は長く、人生は短い。…少年は驚嘆し、印象は少年を決定する。少年は遊びつつ学び、真剣なるものは少年を驚かす。…山頂はわれわれの心をひくが、そこに登る階段は心をひかない。われわれは山頂を仰ぎ見つつ、平地を歩くことを好む。芸術の一部は学ぼうが、

芸術家はすべてを必要とする。芸術を半ばしか知らぬ者はつねに迷い、多くを語る。芸術を完全に所有する者は行為するのみで、語ることは稀であるか、あるいはあとで語る。前者は秘密をもたず、力をもたない。彼らの説くところは、焼いたパンの如く口あたりがよく、一日の餓えを満たすに足りる。しかし、小麦粉を<sup>ま</sup>蒔くことはできず、穀種を<sup>こくだね</sup>碾いてはならない (die Saatfrüchte sollen nicht vermahlen werden.)」(山崎訳、137-138頁)。

ケーテは、この句を好んで用いており、たとえば、ペーターが戦死した翌年の1915年2月15日には、「ペーターは白でひいてはならない種子の実であった。かれ自身は<sup>はしゆ</sup>播種であった。わたしは種子粒の種子の播き手であり、栽培者である」といった表現がみられる (Tagebücher, s. 183. 鈴木訳、88頁参照)。

また、1915年1月28日のハンス宛の手紙によれば、ケーテはゲーテのこの小説を、当時、兵役に就いていたハンスのもとへも送っている (鈴木訳、221頁参照)。

先に引用した1941年12月の『日記』はこう続く。「この言葉がくりかえされるなんて、なんとも奇妙なことだ。わたしは、もう一度同じテーマをとりあげる — 三度目になるのだが — 決心をし、二、三日前にハンスに言った。『これは、ともかく、わたしの遺言なのです。〈種を粉に挽いてはならない〉のです。』それでわたしはもう一度同じテーマで描いた。仔馬のように好奇心にみちて外の空気を嗅ぎにでようとする少年たち、正真正銘のベルリンっ子たちが、一人の女によって引きもどされる。その女 (年とった女) は、子どもらを自分のマントの下にかかえこみ、力づくで放すものかと、腕を少年たちの上にいっぱいひろげている。〈種を粉に挽いてはならない〉 — この要求は〈二度と戦争をするな〉とおなじく、あこがれのような願望ではなく、掟なのだ。命令なのだ。」(Tagebücher, ss. 704-705. 志真斗美恵『ケーテ・コルヴィッツの肖像』續文堂、2006年、277頁参照)。

さらにまた、ケーテは、1941年末から1942年初頭 (Ende 1941/Anfang 1942) にかけてイェーブ (Beate Bonus-Jeep) に宛てて書いた手紙でも、この作品に触れている。「昨日は大変うれしい日でした。・・・わたしの石版刷「種子を粉にひくな」が終わりました。今度のものは種子すなわち16歳の (「おそらく、これは転記ミスである。オリジナル版では、確かに〈6歳〉と書かれている。」 Käthe Kollwitz: Zeichnung, Grafik, Plastik; Bestandskatalog des Käthe-Kollwitz-Museums Berlin/bearb. von Annette

Seeler. 1999. S. 322. つまり、鈴木が底本とした書簡集自体に転記ミスがあった。－引用者注）  
腕白小僧たちが、母の外套のそとへのがれ出ようと機会をうかがっているところ  
です。しかし老いた気丈な母親は『いけません、あなた方はここに止まるの  
です。時としてあなた方は、髪をむしりあうのもよろしい。しかしあなた方が  
大きくなれば、あなた方は生活をうち立てなければならない、そして再び戦争  
を起こしてはならない』とっています。石は明日、印刷所に渡されます。そ  
れがうまくゆけば、わたしの心の中のあるものが、また一つ生まれるわけです」  
（鈴木訳、277頁参照）。

「種子を粉にひくな」。「ペーターは白で挽いてはならない穀物の種であった」。しかし、この句に込めたゲーテの意味合いを超えて、ケーテはさらに、そこに彼女に独自のメッセージを込めていく。ケーテはその句に、みずからに与えられた生命を、なお生き続けなければならない理由を込めている。二男ペーターを戦死させても、さらには夫カールの死、初孫ペーターの戦死を知ることになっても、つまりは生命体が孤独でしかあり得ないということが露わになった後でさえ、たとえば、ヘリの墜落現場で無残な姿となった赤木でも耐えて萌え出るように、なお未来に向かわなければならない——。ニヒリズム、あるいは絶望を拒否するケーテの意志。

1915年2月21日、戦地にいる長男ハンスに宛ててケーテは手紙を書く。「あなた方、わたしの腹をいためた子たちが、わたしの任務であったように、わたしの他の任務は制作でした。・・・自分の持っている計画を最後の仕上げまで働きぬく義務を、生活している誰もが持っています。・・・ペーターは『無駄つきしてはならぬ穀物の種子』でした。かれそのものが穀物の種子でした。・・・わたしは穀物の種子ではありません。わたしは自分に与えられてある種子を土に撒く役目をもっているだけです。そしてあなたは、わたしのハンスよ？あなたは生きるために生まれたのではありませんか。あなたはそうであるべきです。そしてそれを信じて下さい」（鈴木訳、224-225頁）。

この小さな島で生きる人々は、「カンポーヌ ケューヌクサー」（艦砲射撃の喰い残し）と、静かに三線さんしんをひく。そして、現在なお息苦しい状況の下、こう自問しつつ時代と向き合っている。「マーカラ ワジーガ。ターンカイ ワジーガ。

ヌガーラサン」(積年の恨み辛みのどこから怒りをぶつけたらいいのか。誰に対してぶつけたらいいのか。許さない)。「クワヤ ウマガグワーヌ ジデーマディン キチヤ ヌクチャー ナユミ。クレー ゼツタイ ナラン」(子や孫の時代まで基地を残していいのか。これは絶対にあってはならない)。

絶望のなかにあって、なお絶望してはならない理由が、ケーテ最後の石版画には込められている。

今年は「世替わり」して40年経った。「復帰40年の軌跡『時の眼-沖縄』比嘉豊光・山城博明 写真展」が、浦添市美術館(5月15日～27日)と佐喜真美術館(9月26日～10月22日)で開かれた。この拙い訳に向かっていた折、10月13日、佐喜真美術館で山城博明(聞き手:國吉和夫)のギャラリートークがあった。「油断するとまた、丸木位里・俊さんの沖縄戦の図のようになるよ」という発言を聞いて、私は、しばらくケーテの生涯を貫く志操を思い描いていた(2012年10月18日の『琉球新報』に当日の記事が掲載されている)。(2012年10月25日)

## ケーテ・コルヴィッツ「1914-1933年 変化の歲月(1943年)」

私たちは四大家族でありましたが、1914年を迎えるまで、その家族全員がそれぞれに幸福な日々を過ごしておりました。夫のカール(Karl)と私は各自の職務を果たしながら生計をたてておりました。長男のハンス(Hans)は大学で勉学に励んでおりました(文献学、フライブルグ大学、ボン大学)。二男のペーター(Peter)は、ギムナジウムの学生でしたが(Obersekunda, 9年生ギムナジウムの第7学年。-訳注)、将来の夢に突き動かされて、学校を退学しておりました。彼は、画家になるという夢を抱いておりました。そこで、私たちは、冬の期間中は美術学校に通うこと、夏を迎えるまではカンバスの前に立つことはせず、理論を学ぶこと、という取り決めをいたしました。

ペーターは、ワンダーフォーゲルと自由ドイツ青年運動(die Freideutsche Jugend)に強い関心をもっておりました。仲間とともに、ときには単独で旅行に出かけたり、あるいはまた、徒歩で近隣を巡っておりました。

そうした日々を送っていたそのとき、サラエボで一発の銃声が鳴り響きました。

1914年の夏、カールと私は、東プロイセン沿岸のゲオルゲンスヴァルデに滞在しておりました。その避暑地には、当時かなり年老いた母親も、姉のユーリエ (Julie) に付き添われて同行しておりました。ペーターは、リヒャルト・ノル、ハンス・コッホ、ゴットフリート・レシッヒ、そしてエリッヒ・クレムスといった友人たちと一緒にノルウェーに旅行に出かけておりました。ハンスは、この旅行には同行しておりませんでした。

サラエボで起きた突然の出来事を、私はゲオルゲンスヴァルデで知りました。私たちは、滞在先から急遽、ベルリンに戻ってきました。8月2日のことだったと思います。戦争が実際に起こったということが、しだいに明らかになってきました。シュレーゲンの駅で、ジョーレス (Jaures, Jean Leon 1859-1914. フランスの思想家、政治家。社会民主主義者でフランス統一社会党のブレン。1914年7月31日、フランス参戦の前夜、人道主義の立場から戦争反対を主張したが、モンマルトルのカフェで熱狂的な国粋主義者の銃弾に倒れた。 - 訳注) が殺害されたことを耳にしました。ベルリンに着き、カールが私たちの旅行用トランクを探し出すのに四苦八苦している間、私は、フリードリヒ通りの駅のカフェで、カールを待っておりました。カフェにただよう或る種の雰囲気。自宅に戻ると、間もなくハンスがやってきました。カールとハンスは、一息入れる間もなく、ウンター デン リンデン (ベルリンの中心街。 - 訳注) のほうへ出かけていきました。私は外出せずに自宅に留まっておりました。世界が崩れ落ちたような気がいたしました。

ハンスは、すでに入隊しておりました。ペーターは、そうした出来事を知っているのかどうか、まだ旅行先から戻っておりませんでした。彼からの連絡がなく、しばらく、やきもきしておりましたが、やっとペーターから電報が届きました。そこには彼らが国境を越えることができずに未だドイツに帰国してないこと、送金してほしいことが記されていました。八方に手を尽くした結果、やっと送金することができました。そうした手続きを終え、しばらくいたしますと、ある日突然、彼は自宅に戻っておりました。ペーターが無事に帰宅し、その後、数日が経ったあとのことでした。彼が、たとえ志願兵としてであっても、自分はこの戦争に参加しなければならないのではないか、と私たちに問いかけてきました。当時、彼の年齢といえば、まだ18歳を半ば過ぎたばかりの頃でした。

戦争に対する態度、考え方が私と同様であった夫カールは、駄目だ、と答えました。夫に反対されたペーターは、私に助けを求めてきました。翌朝、もう一度長い時間、ペーターと話し合いました。私の願いは彼の志願を引きとめることでしたが、それはまったく無駄な骨折りに終わりました。そのときの心の動揺をどのように落ち着かせ、整理していったのか。私には今もって、はっきりしません。私は戦争を罵っております。また、私は、息子がもし入隊することができたならば、彼はもっとも危険な戦地への配属を希望するであろうことも知っております。私が息子ペーターの願いを拒まなかった理由は、おそらく、息子と話し合ったこの最後の数時間、私はこの若者と気持ちが完全にひとつにならずにはおれなかったからでありました。息子と一体であらねばならないのなら、それを望むのであれば、私は同意するほか仕方ありませんでした。私たちはまさに、ひとつでありました。

この戦争に加わりたいというペーターの意見に強く反対していたカールも、重苦しい心境で、とうとうペーターに同意いたしました。その後、ついに志願兵にも召集命令が届き、ペーターを含む若者たちが歩兵隊として、ノイ-ルピン (Neu-Ruppin) に集められました。仲間同士が小集団となってそこへ集合し、しばらくしてプレントラウ (Prenzlau) に移り、さらにまた、ヴュンスドルフ (Wünsdorf) へと移動していきました。ペーターは、他の兵隊たちと比べ、十分な訓練を受けることなく (膝の関節炎によって、ペーターは自宅治療のため2週間も家に帰されておりました)、1914年10月13日、ヴュンスドルフから前線へと出発しました。

それから10日後、彼は戦死しました。

しばらくして、ハンスが家に戻ってきました。(当時、ハンスもすでに召集されていたが、彼の所属する部隊はベルリン内に留まっており、帰宅許可を得ることもそれほど難しくはなかったように思われる。ハンスは、しばしば家に帰っている。—訳注)。彼は、衛生兵になりたいと言ってきました。というのも、衛生兵になれば繰り上げて徴用してもらえると思ったからでありました。(ハンスは、大学では医学専攻で、また当初の志願先は騎馬砲兵隊であった。—訳注)。今度という今度は、私は一步も譲りませんでした。私は、ハンスがどれほど前線に赴き、戦場でどの任務に就きたがっているか、と

いうことをよく承知しておりました。そしてまた私は、彼にとって、どのような犠牲的行為であれ、それは何の役にも立たない、ということを知っておりました。結局、ハンスは、私たちのために諦めてくれました。ただカールと私に対する愛情 (Liebe) だけから、そうしたのでありました。その後、彼の所属する部隊は、ベルギーへ移動していましたが、そこでジフテリアに罹り、苦しんでおりました (カールが彼を自宅に連れ戻してくれました)。(この節のケーテの文章は微妙である。当時の『日記』 - 1914年11月27日 - には、戦争をめぐる夫婦間、親子間の揺れが赤裸々に綴られている。「カールは軍事省に手紙を書き、頼もうとする。この若者が前線に送られないようにと。私にはそれはとても不快だ。何故? カールはいう。『お前がもっているのは、身を捧げることへの力と去らせることへの力だけだ。引きとめておく力はこれっぽっちも。』(Du hast nur Kraft zum Opfern und Loslassen - nicht die geringste zum Halten.)と。彼は最初、兵士になろうとした、次に衛生兵へと後ずさりした、今度はさらにチフス患者療養所へと後ずさりだ。すべての点で、彼が自分で考えたことと別なことになってしまう。・・・私が、あの若者の願いは私のものでもあるとって - まさにペーターのときにそうであったように - カールに反対したなら、それはカールよりも彼を愛していないということなのか? 彼を引き止めておくことを自分の義務と感じているカールよりも? でも、この彼を徹底して引きとめておこうとすること、このことを、そう、カールは自分の利害からするのではなく、ハンスのためにする。はじめ私はカールのことを悪くとっていた。私はそれを当事者たちのエゴイズムとみなしていた。しかし、それ以上のものであるのだ。つまり、若者の価値多き生命への偉大な尊敬なのだ」。Tagebücher, s.176. 清・高坂、前掲『ケーテ・コルヴィッツ - 死・愛・共苦』69頁参照。 - 訳注)。

戦争に対し、上に述べた見解に加えて、そのほかにまだ私の心に浮かんだ別の思いを記しておかなければなりません。戦争というもののなかに私は、人生においてはじめて、民族や民衆 (Volk) との絶対的な連帯意識を感じ、私自身もそこへしっかりと繋がり、包み込まれているのを覚えたのでありました。若い兵士たちの表情もまたそうでありました。(ケーテの戦争に対する心の揺れを、志真斗美恵はこう指摘している。「ケーテ・コルヴィッツは、戦争には反対であった。にもかかわらず戦争がはじまった時、愛国心から戦争に志願してゆく若者たちの心情に、同調する気持ちがあったことも否定できない」。志真、前掲『ケーテ・コルヴィッツの肖像』、122-123頁参照。 - 訳注)。

私は、その後しだいに、まったく異なった思考に行きつくのではありますが、当時は、私のなかに新たに生じてきた戦争に対するこうした考え方を、長期にわたって持ち続けておりました。つまり、若い兵士たちのとった行動にかんしては、私の受け止め方に変化はなく、私には、彼らはそのような行動をとる以外仕方がなかったように思われました。私のなかで、彼らの表情は、飾り気がなく、素朴な信心深い、敬虔な気持ちに包まれたままで残り続けておりました。

その後しだいに、戦争には人間のなかに存在するもっとも醜悪なもの、同時にまた最良なもの (Schlechtestes und Bestes) を増進する側面もある、という考え方から、ふたたび変わっていきました。つまり、戦争は絶対に認めるわけにはいかないものである、と。大まかに言えば、おそらく私のなかで、そのように戦争観が揺れ動いておりました。(1916年10月11日の『日記』にケーテは記している。ペーターをはじめドイツの志願兵たちはみな、祖国愛の理想に生命を捧げた。が、それはイギリスやフランスの青年たちも同様であった。「その結果は相互の狂気沙汰となり、欧州はすべての美しいものを失った。それではこれらすべての国々の青年は欺かれたのであろうか。戦争をひき起こすために、かれらの献身への能力を人は利用したのであろうか。どこに責任者がいるか。…いつ、どのようにして覚醒が起こるのであろうか。…ただたしかなことは、若人たち、ペーターたちが二年前に、敬虔な気持ちで戦争にいったこと、そしてドイツ国のために死のうと思う通りを実行したということだけである。かれらは死んだ。…わたしが今、戦争を狂気沙汰と見ることは、—ペーターよ、—あなたに対して誠意を欠いたことでしょうか。ペーターよ、あなたは信念に燃えて死にました」。Tagebücher, ss.279-280. 鈴木訳、105、106頁。さらに、1918年3月20日の『日記』では、「欺かれた」と憤っている。「もし誰かが病気のために、死んだとする—まだ若かったのに—でもそれは力の及ばない事柄である。したがって結局はあきらめなければならない。かれの肉体が生きえなかったから、かれは死んだのだ。だが戦争の場合は、それとは違う。ただ一つの可能性、ただ一つの観点から進んで生命を捨てたのである。すなわちそれはドイツの権利と防衛の義務とを守らなければならぬとの信念があったればこそやれたのである。内心に肯定する気持ちがなくて、どうして親がその息子たちを単なる屠殺場へ送ることができようか。しかしすべては裏切られた。わたしの胸はだまされたという感じでいっぱいだ。この怖ろしい欺瞞にひっかからなかったら、おそらくペーターはいまも生きていたことだろう。ペーターとそして幾百万の他の若ものたち。みんなが欺かれたのだ」。Tagebücher, ss.359-360. 鈴木訳、

128頁。 - 訳注)。

カールの考え方は、終始一貫変わらないものでありました。

当時、リーバーマン (Liebermann) が私に「仕事をするのですよ」と手紙を書き送ってくれました。私は、仕事をしました。1915年の春から、志願兵のための像の制作にとりかかりました。それは大がかりな仕事でした。私は、その記念像が完成したら、ハーフェル川のどこかの丘陵、たとえばシルドホルン (Schildhorn) の辺りにでもその像を設置するつもりでございました。しかし、(ペーターのためだけではない - 訳注) すべての志願兵を追悼するためのこの記念碑を完成させるためには、手持ちの資金ではどうしても足りませんでした。そこで、費用を工面してもらうため、私は、市長のライケ (Reicke) のところへ行き、公的な助成金を得ることができないかどうか頼んでみました。それから私は、ジークムントツホーフにある自分のアトリエに、その記念像を制作するための大きな骨組みや足場を組み立ててもらいました。一体どのくらいの年月、私はこの仕事にかかっていたのでしょうか。今はもう、はっきりと述べることはできません。数年が過ぎ去っていきました。そして、とうとう私の体力あるいは気力も限界に達し、尽き果ててしまいました。私は、この仕事を断念せざるをえませんでした。しかし、その後、ペーターの墓が、戦没者のための大きな共同墓地に移され、そこに埋葬されるという知らせが届いたとき、新たな構想が生まれました。これまで思い描いていた構図を破棄し、もう一度、この仕事に向き合うことになるのですが、その新たな構想とは、記念像を一對の彫像にするというものでした。

私は、父と母の一對の塑像 (Skizze) を作成しました。そして、それを当時の政府に提示して、もし経済的な援助が必要となった場合には助成金を支給していただきたい旨、再度願い出しました。さらに、私はカールと連れだって、現在ペーターが埋葬されている場所 - ロッヘフェルト (Roggevelde, 1914年10月22日、ペーターはベルギーの西フランドル地方ディクスモイデ郊外で戦死した。ロッヘフェルトはそのディクスモイデ近郊にある。 - 訳注) へ出かけました。それは私が60歳をむかえる前のことでもあります。その共同墓地は、作られて間もないもので、施設もまだ整っておりませんでした。土地も平らではなく、また有刺鉄線で取り囲まれており

ました（私たちが上がってくるのをひとりのベルギーの兵士が手伝ってくれました）。私たちはペーターの墓を見つけました。私は、その墓地の見取り図を描きました。

その後、ベルリンに戻り、私は新たな気持ちで、その仕事に取り掛かりました。私の60歳の誕生日にあたって、政府から石像を制作するための費用として1万マルクが支給されました。1927年、石膏で仕上げた像をアカデミーで展示しました。私は、ディーデリヒ教授（Diederich）とアウグスト・ラーデス（August Rhades）に、その石膏像をベルギー産の花崗岩で仕上げるように依頼しました。そして、それらの石像は、1932年の夏、ロッヘフェルトの墓地に設置されました。

その除幕式には、カール、ハンス、それに私も列席しました。

その時、私たちは、ディクスモイデ（Dixmuiden）で初めて、フラマン党（Flamenpartei、ベルギー国内には、ゲルマン系のフラマン人とラテン系のワロン人が併存している。－訳注）によって建立された大きな塔を見ました。その塔の先端には、ドイツ語、フランス語、英語そしてフラマン語で、或る語句が刻印されていました。二度と戦争を繰り返すな（Nie wieder Krieg）と。（これは、「二度と戦争を繰り返すな」行動委員会がデモへの参加を呼び掛けたスローガンである。このスローガンによって、ドイツ国民は平和への意志を示そうとした。1923年にケーテは、社会民主党ライプツヒ支部の依頼で、このスローガンをタイトルにしたポスターを作成している。－訳注）。

1918年に戦争は終わり、そして、つかの間の戦間期がやってきました。社会民主党が政権をとるように思われましたが、しかし、それは実現しませんでした。というのも、彼らはひとつにまとまるということがなかったからであります。社会民主党を中心に統一行動をとるということに対して、スパルタクス団（Spartakus、ドイツ社会民主党の左派から派生したもので、社会民主党を痛烈に批判した。後のドイツ共産党の前身。－訳注）が反対しておりました。

リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクが殺害されました（Karl Liebknecht, 1871-1919, Rosa Luxemburg, 1870-1919, 両者ともスパルタクス団をつくった主要メンバーである。1919年1月のベルリン蜂起がエーベルトを中心とする社会民主党政府によって鎮圧されたとき、二人とも殺害された。－訳注）。

夫のカールは社会民主党にとどまり、その頃、社会民主党の市議会議員とし

て活動しておりました。

私は、アカデミーの会員に選ばれました。（1919年1月、プロイセン芸術アカデミー会員では初の女性会員となり、プロフェッサーの称号を授与された。ちなみに、上の訳注に記したスパルタクス団のベルリン蜂起と同時期である。－訳注）。私の欠点、つまり、さまざまな考え方へ共感してしまい、思想信条を明確にできない性格が、重大な結果を招くことになりました。（「社会派芸術家」としてのケーテに対して、人々は党への加入も含め、政治的役割を大いに期待した。が、ケーテ自身は、おそらく、そうした政治的態度、立場を明確に表明することには躊躇し、曖昧なまま、時にはそうした要請に反発し、芸術作品の制作に打ち込んでいた。そうした政治的態度表明とは別に、ケーテは、1928年、プロイセン芸術アカデミーの版画室長に就任する。しかし、1933年にはハインリヒ・マンとともに、アカデミーを除名される。－訳注）。私は、社会民主主義よりもむしろ共産主義の考え方に魅力を感じておりました。そして、実際、私は共産主義者のために、いくつかの石版画を制作したこともありました。（たとえば、ケーテは、遺族からの依頼で、リープクネヒトのデスマスクを描いている。さらに、そのときのスケッチをもとに「カール・リープクネヒトの思い出に」を、素描、銅版、石版、木版で制作している。また、1920年の『日記』には次のような記述がある。「わたしは芸術家として、すべてのものから感情の成分を抽出し、わたしの上に作用せしめ、外へ発揚させるところの権利をもつ。だからわたしは『リープクネヒトに別れを告げる労働者』を描く権利を、政治的にはリープクネヒトに従わずとも、労働者に捧げる権利を持っている。そうではないだろうか」。Tagebücher, s. 483. 鈴木訳、146頁。－訳注）。というも、彼らは、社会民主主義者よりもはるかに活発に、そしてまた積極的に、私に対して仲間に加わるように促しておりました。しかしながら、共産党員になること、それに関して私は一貫して断り続けました。というも、政党の戦術・戦略が私にはどうしても好きになれませんでした。

1927年に、ソヴィエト・ロシアの建国10周年の記念式典が催されました。その式典に私は招待され、カールとともにロシアを訪問いたしました。私は、今度の旅を、もやもやとした曖昧な気持ちではなく、冷静なまなざしであらゆる物事を観察しようと考えておりました。私が当地でどれほど元気づけられてドイツに戻ってくることができたか、それを言葉で表現することはできません。ロシアは私を突き動かしてくれました。（おそらく、刻々と激変する政治的現実

対する周りの人々からのケーテに寄せる過剰な期待、加齢による意気消沈、また、何度も構想を練り直してなかなか進まないペーターのための記念碑制作、芸術上の苦悩などが、当時のケーテに覆い被さっていた、と思われる。－訳注)。私は、社会民主主義の思想に凝り固まっていたカールでさえも、ロシアに同行することによって（共産主義への理解を深め－訳注）彼の頑迷な思想がかなり和らいだことを感じ、喜びを覚えました。そこには実際、数多くの新しい公共施設が備わっており、その素晴らしい環境がカールを驚かせたように思います。ロシアから帰国すると、或る人権団体の催しの席で、幾人かがロシアの現状について短い報告をおこないました。その報告者のひとりにカールもまた含まれておりました。

時代の流れは、第三帝国へ向けて突き進むようになっていきました。1933年、私たち二人は数週間、マリーエンバートへ逃れました。そこではヴェルトハイマー一家（Wertheimers）が私たちを迎え入れてくれました。しかし、私たちは、そこへそれほど長くは留まりませんでした。そこでの滞留を切り上げたからといって、当時の私たちは、亡命することなどは考えたこともなく、しばらくして私たちは、また、ベルリンに戻ってきました。カールは、二度も健康保険医の認可を取り消されました。が、その都度、取り戻すことができました。私たちのもとに家宅捜索がおこなわれたことはありませんでした。当時の数年間は、私たちふたりにとって重苦しい日々でありました。しかし、そうした日々にあって、カールは社会の動きのなかで良い兆候と思われるものを正当に評価し、さらにはそれを褒め称えることによって、私の気を紛らわせてくれました。そして、実際、心を動かされるものも全然なかったというわけではありませんでした。が、おおよそ私たちにとって、当時の動きに歩調を合わせることはできませんでした。というより、むしろ時代の流れに対して、徹底的に拒絶せざるをえませんでした。ユダヤ人迫害のあった日、（Pogrom、元々は帝政ロシア時代にあった反ユダヤ運動を指す言葉。1938年11月7日、パリのドイツ大使館でドイツ人書記官がポーランド系ユダヤ人の17歳の少年に狙撃され、2日後に死亡したことが引き金となって、9日から10日にかけてドイツ全土でシナゴークやユダヤ系店舗が放火、破壊、略奪された。壊されたガラスが散乱し、街灯に照らされ輝いたイメージから「水晶の夜」クリスタル・ナハトとも称された。ここでは、11月9日の晩にベルリンで起こったボグロムをさす。－訳注）－1938年のことでした－、

私はクロスター通りにあった私のアトリエにいました。私はそのアトリエからすぐにケーニヒ通りに向かいましたが、そこでは、きわめて悲惨な出来事がすでに起こっておりました。自宅に戻ると、カールは不在でした。彼は、ユダヤ地区へ出かけていたのです。彼は戻ってくると、そこで見てきたことを私に話してくれました。それは彼がこれまで体験したことなかで、もっとも醜いものであった、というものでした。そうした悲惨な状況を伝えながらも、時折、彼は言葉に詰まってしまい、話し続けることができませんでした。